

● 研究内容

「ランパンにおける HIV/AIDS の臨床疫学」

2003 年～タイ全土に国内生産の抗 HIV 薬 (GPOvir®) が普及し、多剤併用療法が無料で受けられるようになると HIV 感染者をめぐる状況は一変した。本コホートではランパン病院における抗 HIV 薬治療の影響について、主に臨床的なアウトカムに着目し多様な側面から疫学的にアプローチした研究を行っている。抗 HIV 薬普及前後の HIV 感染者生存率の変化、抗 HIV 薬治療の失敗に影響を与える臨床的・人類学的・社会的因子の解析、抗 HIV 薬治療普及による日和見感染症の罹患率の変化、HIV/HBV・HCV 重複感染が生存率に与える影響、について現在解析が進んでいる。また、質的研究を併せて行い、量的研究では集めにくい患者背景に関する情報も収集している。2007 年には患者へのインタビューとグループディスカッションにより、服薬行動に影響を与える因子、患者の感じている抗 HIV 薬治療後の変化 (差別偏見、家族の経済状況など) が明らかになった。ランパン病院で抗 HIV 薬治療を最初に開始した患者は 2008-2009 年で治療開始後 5 年に達する。今後は治療開始 5 年目の評価として、治療成績とリスク因子解析、副作用や薬剤耐性による治療失敗、薬剤変更など長期的に生じる問題についての研究を進めていく予定である。

● 海外活動

現地で Dr.Panita が日々患者さんたちと向き合い経験されていることをデータベースにまとめて蓄積し、解析というプロセスを経て形にして送り出す、というのが私達の仕事です。必要時は数カ月現地に滞在し、カルテや質問票、あるいは患者さん達との会話から情報を収集します。日本にいる時も現地スタッフと常に連絡を取り合い、年に数度は現地でデータベースの更新、確認作業を一緒に行います。



ランパン病院

患者さんとのグループディスカッション



現地スタッフと共同でのデータベース作成。カルテや質問票などを参照しながら慎重に進めていきます。

患者さん達をずっと見守ってきたパニタ先生

